

これの小床を仮の靈舎と天の菅曾の清々しく被い清めて今し鎮め奉り齋い奉る故天理教△△分教会長△△△△大人の靈の御前に慎しみ敬い歎かいて白さく

空蟬の人の世は果敢なく定め難きものにして我がものと思うこの身一つさ  
えかしものかりものとは知りつれど 親神は現世での陽氣ぐらしを目標と  
され尚百十五歳を定め命と約束されてありしを汝大人の昨日に変わる今  
日の御姿を見奉りては誰かは驚き嘆かざらむなどてこれの分教会を退向に  
なして かくはあわただしくも出直しまししぞ あな悲しあな悔し今は早  
や汝大人の笑ましき面影を見る能わずああ汝大人の明るき御声に再び触れ  
ることなし

思い返せば汝大人は日本海の波打つ静かなる○○の町に生を亨けられ 疾  
風怒濤の世とも云うべき大東亜戦争中の昭和十九年学舎を終え終戦後間も  
なく東京なる△△商店を振り出しとして関東の人となられ 以後はブロッ  
ク工事を専業とされたり やがて波高き人生航路の羅針盤を我が手にせむ  
ものと聖地おぢばにて三ヶ月の修養科に学ばれ程なく上級○○の親会長様  
方の親心溢れるお世話取りを受け 昭和○○年の春芽出度く 故△△刀自  
と親神の御前で結婚式を挙げられ その後は次々と子達孫達に恵まれ併せ  
てその幸せを地域社会に及ぼすべく△△分教会を新たに開設されたり  
ああされど如何なる思召ならむ凡そ三十七年に亘る長の年月△△家の台と  
なり芯ともなられし心優しき妻が夫△△大人に深く厚く感謝しつつ俄かに  
六十五歳にて来世に旅立たれようとは

汝大人はかかる大節を越え今日に至る三年半はいわば淋しき男やもめの一  
日一日なるも朝に夕に逆境の中の光りとも云うべき ひながたの道を慕い  
つつひたすら子達孫達の行く先を楽しみ 或いは又△△分教会の内容充  
実を只管乞い祈み奉られしに・・・

げに現世に生まれ出づるも出直すも事ごと親神の御量にしあれば 今更  
に歎き悲しむも効無きことと明日を御葬の日と齋い定めて 今宵しも新靈  
をこれの靈代に齋い奉り鎮め奉り御前に種種にの物を備え奉りて拝み奉ら  
くを聞食し諾い給いて 今ゆ後家族親族はもとより道の子たち一同を八十  
連綿五十彊八桑枝の如く向坂に立ち栄えしの給えと 正面に飾られし額の  
写真に在りし日の御姿と功績を偲び露けき袖の涙をしばらくつつ恐み／＼も  
白す